

記者発表（配付）資料

令和5年4月19日

所属部課	部長	館長	総括学芸員	担当	連絡先
萩市商工観光部 萩博物館	村田卓二	大槻洋二	道迫真吾	平岡 崇	0838-25-6447

件名	長州萩藩士が伝えた「徳川家康の小袖」および「ジュリアおたあ書状」の特別公開について
----	---

新発見！長州萩藩士家が400年間守り伝え続けた徳川家康の「小袖」

悲劇の女性キリシタン「ジュリアおたあ」幻の直筆書状

令和3年12月、旧長州萩藩士村田家に代々伝わった「徳川家康の小袖」が、村田家から萩市に寄贈されました。研究の結果、この小袖は、江戸時代初期に村田家初代の村田安政（うんなき）が徳川家康と謁見した際に家康より拝領したものと伝えられ、歴史的・美術的価値がきわめて高いものということが判明しました。

さらにこの村田安政の姉おたあからの書状などが、村田家から寄贈されました。おたあは「ジュリアおたあ」の名で全国的に有名な、朝鮮半島から来日したキリシタンの女性です。おたあによる直筆の発見はこれまでに例がなく、本邦初のことであり、大変貴重な資料です。この書状は慶長14年（1609）におたあが弟村田安政に送ったものです。

◆特別公開「長州萩藩士が伝えた徳川家康の小袖」

会期：令和5年4月29日（土祝）～6月18日（日）

※令和5年6月14日（水）～6月16日（金）は休館

場所：萩博物館 企画展示室内特設コーナー

◆特別公開記念講演会

演題：「長州萩藩士が伝えた徳川家康の小袖」

講師：ふくしまさこ 福島雅子氏（学習院女子大学准教授）

日時：令和5年5月4日（木祝） 午前の部：10時～11時30分

※各部定員80名、参加費無料 午後の部：13時30分～15時

福島雅子氏略歴：東京都出身。東京芸術大学大学院美術研究科芸術学専攻工芸史研究分野博士課程修了。博士（美術）。東京芸術大学美術学部教育研究助手を経て、現職（学習院女子大学国際文化交流学部日本文化学科准教授）。主な著書に『徳川家康の服飾』（2018、中央公論美術出版）がある。

【おもな寄贈資料と寄贈者について】

徳川家康の小袖(衣服)：村田安政が徳川家康から下賜された衣服(身丈^{みたけ}121cm×衿^{ゆき}59cm)。

実際に家康が着用したものと思われる。正式名称は「白練緯地葵紋付変り段亀甲模様小袖(しろねりぬきじあおいもんつきかわりだんきっこうもようこそで)」。

ジュリアおたあ書状：徳川家康に近侍したジュリアおたあが実弟の村田安政に宛てて書いた書状。おたあは「ジュリアおたあ」の名前でも知られる朝鮮半島から来日したキリシタンの女性。

寄贈者：村田矩夫(のりお)氏。矩夫氏は村田安政の直系のご子孫、昭和16年(1941)生まれ、埼玉県在住。東京農業大学農学部卒、長年にわたって川口市役所に奉職した後、(独)農業・食品産業技術総合研究機構生物系特定産業技術研究支援センターで研究補助員をつとめる。その後、川口緑化センター緑の相談員、川口市立グリーンセンター緑の相談員を歴任した。

【おもな資料の歴史的価値】

- ① 小袖の形態：後世の小袖と比較すると、袖幅が狭いのに対して身幅が広く、立襟^{たてづま}が短いなど、近世初頭の小袖に通有する形態上の特徴を示している。
 - ② 小袖の素材：練緯地^{ねりぬきじ}(経糸^{たていと}に生糸^{よこいと}、緯糸に練糸を使った平織の絹織物のこと)が使用され、亀甲繫などの主要な意匠を全て縫い絞りで表わすなど、尾張徳川家等に伝来する徳川家康所用小袖類と共通する特徴が確認できる。
 - ③ 小袖の染織技法：五か所に配された葵紋は、縫い絞りのみで表わされ、葵の葉は多色に彩色されており、葉に露が表されるなど、徳川家康所用服飾類に見られる葵紋の表現の中でも初期の形式に共通する特徴を有している。当該小袖に表された葵紋は、徳川家康所用の服飾類に多く見られ、江戸時代以降は徳川將軍家および一門の家紋として使用が制限されるとともに、徳川家の権威を象徴する表象として扱われた。したがって、五か所に葵紋が配された当該小袖は、徳川家康や近い徳川家の者が着用するために制作されたと考えられる。
- ・以上の要素から「白練緯地葵紋付変り段亀甲模様小袖」は、徳川家康のために作成された小袖であることの可能性が高い。また、新たに確認された江戸時代初頭の武家服飾の稀少な現存遺品といえる。
 - ・日本キリシタン信仰史において群を抜いた知名度を誇るおたあの直筆書状は、今回村田家から萩博物館に寄贈された3通以外発見されておらず、日本で唯一の事例であり、極めて貴重な資料である。
 - ・おたあの手紙の内容は、実弟と思われる村田安政(うんなき)の素性を尋ねるもので、その記述内容からふたりが両班(やんばん、朝鮮王朝の貴族階級)であることも分かる。また、文禄・慶長の役(朝鮮出兵)におけるおたあの“戦争体験”についても語られており、朝鮮で捕らえられて来日した女性の記録、証言という点において極めて貴重かつ重要な歴史資料である。

【小袖の今後について】

令和5年(2023)4月29日(土祝)～6月18日(日)まで、寄贈を記念して特別に公開する。公開終了後の同年7月には、福島雅子氏(学習院女子大学准教授)による小袖の研究論文「新出の伝徳川家康下賜「白練緯地葵紋付変り段亀甲模様小袖」について」が本邦で最も歴史ある美術研究雑誌『國華』(國華社刊)に掲載予定。その後、経年による傷みが随所にみられる当該小袖は、専門事業者による修復を検討する予定(予算処置、日程等の見込みは不定)。

【村田安政(うんなき)の略歴】

父は朝鮮王朝の濟運大軍節度使(ぜうんだいぐんけつ)であった金世王温(きむせいおうふん)。母は乙君時(おつくんし)。6人姉弟の第5子(次男)として誕生した。朝鮮での名前は「うんなき」または「みびい」であったと思われる。6歳ごろに朝鮮出兵(文禄の役)に遭遇し、捕らえられたと推測されるが詳細は不明。来日後の足取りも詳しくはわからないが、おたあの安政宛書状から慶長14年(1609)には、毛利家家臣平賀家のもとにいたものと思われる。書状をもらった慶長14年以降におたあの手引きによって、徳川家康に拝謁して馬や刀とともに小袖を下賜された。その後毛利家から200石を与えられて家臣に取り立てられる。寛永16年(1639)没、享年57歳。

【ジュリアおたあと徳川家康】

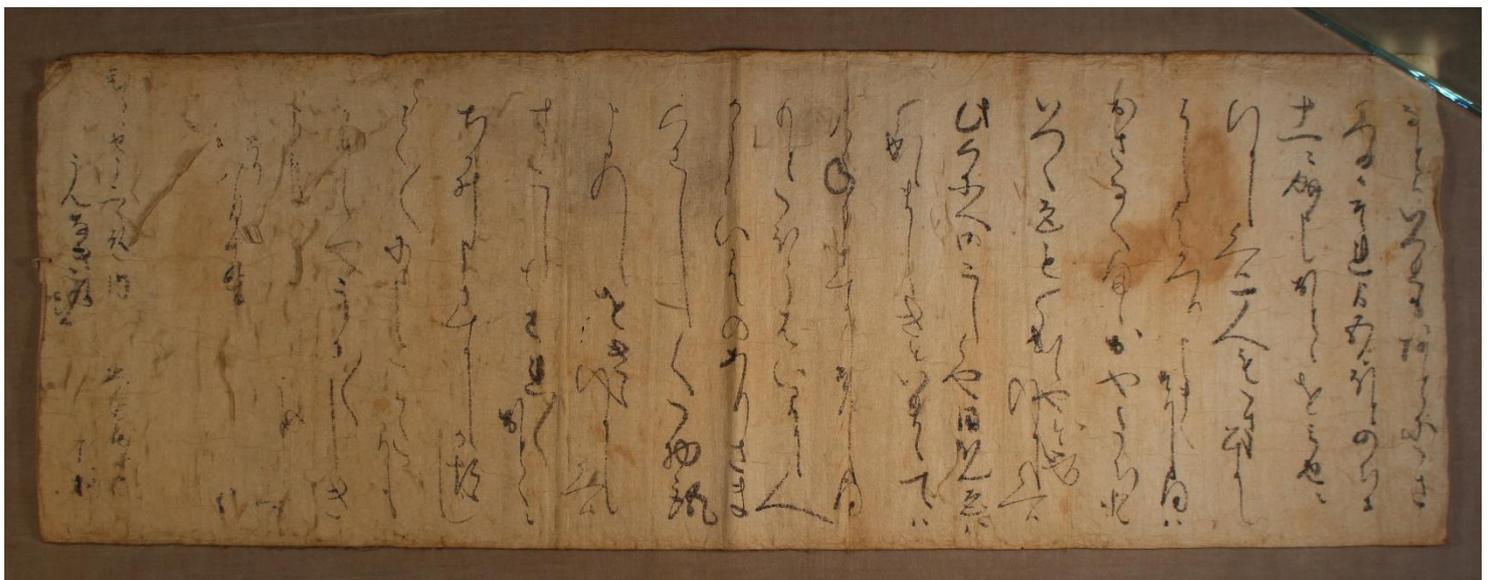
おたあの略歴: 金世王温の第2子(次女)として誕生した。おたあが13歳の頃に豊臣秀吉が朝鮮に出兵(文禄の役)、おたあは都・漢城を追われ親類の知行地を転々とした。その後、一時的に都に戻ったが日本軍側に捕らえられ、14歳で来日したものと推測される。おたあは朝鮮出兵において第一軍を率いた武将・小西行長のもと、肥後国宇土(現、熊本県宇土市)で養われ、行長の妻に仕えたとされる。熱心なキリシタンであった行長のもとで養育されたおたあは、その影響もあってキリスト教の洗礼を受けたと思われる。

家康との関係: 慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いに西軍方として参戦した行長は処刑されたが、おたあは許されて徳川家康の庇護をうけることとなったようである。家康が江戸から駿府に移ると、おたあもそれに付き従って駿府に移った。おたあは行長のもとから離れた後もキリスト教を篤く信仰していた。慶長14年(1609)頃には、弟安政(うんなき)の存在を噂で聞き、安政に書状を出して素性を調べた。おたあは安政を弟と確信して駿府で再会、家康と安政を引き合わせたものと推測される。

安政との再会も束の間、慶長17年(1612)3月に家康が禁教令を發布、おたあも家康から棄教するように迫られたが応じなかった。ついに家康はおたあを追放することを決め、伊豆大島へ遠流にされた。最終的に神津島まで流されたおたあだったが、棄教することなく、神津島で信仰を続けたとされる。その後、遠流を解かれたのか、元和5年(1619)ごろには長崎へ居住していたと記録に見られ、元和8年(1622)には大坂にいたことが記録に残っている。それ以降の足どりは一切不明で、没年も不詳である。



▲伝徳川家康下賜「白練緯地葵紋付き変り段亀甲模様小袖」の後身頃



▲「ジュリアおたあ書状」：とり年（慶長14年、1609）8月19日に徳川家康（大御所様）のもとにいた「おたあ」から村田安政（うんなき）に宛てて書かれた書状。